

大地の子 日中の架け橋

多文化共生研究所・NPO法人どんぐり「モンゴリ」主催
「県大ファンファーレ」企画 2008年11月4日（愛知県立大学講堂）

烏雲（中国名）：立花珠美（日本名）

このたび、NPO 法人どんぐりモンゴリのお招きで、再び祖国に帰って来まして、古くからの友人、そして新しい友人とお会いすることができ、とても感激しています。

私は中国残留孤児です、モンゴル語の名前は烏雲（ウユン）、日本の名前は立花珠美。1938年徳島に生まれました。1940年、2才半の時、両親と共に中国の東北部に渡りました、その当時は王爺廟（現在の内モンゴルウランホト市）に住んでいました。1945年ソ連が中国東北部に派兵し、日本は降伏し、敗戦しました。当時、王爺廟にはまだ引き上げていない日本人が大勢いました、鉄道の橋が爆撃を受け、交通手段が閉ざされました。人々は集まって、徒歩で東南方向にて撤退しました。王爺廟から30キロの葛根廟付近を歩いている時、ソ連軍の航空機、戦車の爆撃で追跡され、逃げ道がなくなりまして、集団自決しました、私の母、姉、二人の弟、一人の妹はこの時亡くなりました。私は運良く、命は助かりました。心のやさしい中国人に引き取られました。中国の養父母は実の親よりもやさしくしてくださいました。生活の厳しい時代にも関わらず、私は学校に行かせてもらいました。家庭の経済事情は大変貧乏の中、大学を卒業するまで、学校に行かせてもらいました。政府から、中学と高校、大学は奨学金もらいました。私は人々に尊敬される人民教師を目指しました。

文化大革命の時、養父母は日本の孤児を

引き取ったことで、日本のスパイとされ、大変ひどい目に遭いました。しかしそんなときでさえ、養父母は一貫して言ったのが、「戦争を起こしたのは日本の軍国主義者達で、日本の子供達には罪がない。だから、養女を引き取ったのは何の罪もない」とうことです。あの特殊の時代において、養父母は精神的にも肉体的にも大変な苦勞を耐えながら、私を愛し続けてくれました。

幼少からの私の最大な願望は、自分を生んでくれた祖国を一目見みたいといことでした。自分の家族に会えたらどんなに幸せかと秘かに心の中で思っていました。しかし、当時の日中両国は敵対関係で国交はありませんでした、私の願望もそのため数十年実現できませんでした。

1972年、中国と日本の国交は正常化しました、私は心よりこれを喜び、同時に私の夢の実現に現実味も見えてきました。心のやさしい方の助けによって、1980年に私の家族の消息が分かりました。1981年8月私はついに40年も離れていた祖国の地四国徳島市に着きまして、兄、親戚と再会しました、当時のことを振り返ると夢のようでした。戦争は中国、日本の両国の人々に多大な災難をもたらし、無数の家族がバラバラにされ、無数の命が落とされました。私は生き延び、今日まで健康で生きていられるのは、すべて善良な中国の養父母と中国人民の御陰です。ですから、1981年私が日本に帰国した時、兄夫婦

と友人達から日本に永住するように説得されましたが、内心は矛盾で悩みました。片方には私を生んでくれた故郷と家族、片方には私を育ててくれた土地と恩のある養父母がいます。いろいろ悩んだ末、私は中国に帰ることに決めました。自分の想いと愛で中国の人民に恩返ししたいと思い、それを実行してきました。

30年間教育現場で仕事をしてきましたが、私は仕事を愛し、自分のすべてを草原人民の子供達に捧げました。私の小さな貢献に対して、中国の人民が私に多大な名誉をくださいました。私は国、内モンゴル自治区における女性の最高名誉である〈全国三八紅旗手〉、〈全国教育分野労働模範〉などの名誉を頂きました。政府からも非常に高い地位を頂きました、私は第8回、第9回全国政治協商会議委員に推薦されました（1993から2002年）、通遼市政治協商会議副主席、通遼市人民代表大會常務委員会副主任も歴任し、2004年定年になりました。現在は庫倫一中（蒙古民族高校）の名誉校長を務めています。

私は内モンゴル自治区の通遼市に住んでいます。内モンゴルは中国の省のひとつです。私が住んでいるのが、内モンゴルの12の盟（市）のひとつで、遼寧省、吉林省と接します。総面積6万平方キロ、人口は310万人、そのうちモンゴル族の人口は自治区モンゴル族総人口の3分の1を占めています。

通遼市は中国四大沙漠のひとつ、ホルチン沙漠の中腹部に位置します。沙漠の総面積は518万ヘクタールです。全国でも、沙漠化のひどい地域に数えます。苛酷な自然環境にさらに自然災害が頻発し、地域経済の発展と地元農牧民の生活の改善に悪影響を与え続けてきました。と同時に、周辺

地域と隣国の環境にも影響を与えるようになりしました。歴史上、ホルチン草原はかつて美しい疎林草原でした、しかし、人口の増加、過放牧、環境に関しての意識不足、遅れた生産経営活動などの原因で沙漠化しました。こうした人的な原因以外にも早魘、風など自然的原因も沙漠化の要因にあげられます。

地元の人々は沙漠と戦ってきました、植林を始め、禁牧、畑を草原へ変えるなど政策を取りながら、法律の整備、資金の投入もしてきました。近年、農牧民の環境意識も高まってきて、少しずつ、緑が帰ってきました。最近の統計を見ると、森林面積は戦後の2.7%から現在の23%までに回復しました。中国の観測データによりますと、中国の四大沙漠の中、ホルチン沙漠が一番緑化率が多くて、緑化速度が沙漠化速度を上回った逆転現象が起きました。

この成績の背後に、日本の民間団体と日本の友人達からの多大なご支援とご協力があります。1994年から菊地豊先生を代表とした日本の沙漠植林ボランティア協会が初めてホルチン沙漠で植林活動を開始しました。それ以来、どんぐりモンゴリなど数多くの日本のボランティア団体が植林活動で活躍し、沙漠緑化に大きな貢献をしました。

日本の植林ボランティア団体の支援と協力によって、徐々に緑が回復し、沙漠の中にオアシスも増えてきました。烏雲の森、阿弥陀の森はもうすでに本当の意味で森になりまして、いまや美しい景色の代表にもなりました。生態系の回復によって、野生動物と野鳥も増えました。食糧、草の生産量も著しく増加し、農牧民の収入も大幅に増えて、生活も改善しました。

沙漠の緑化活動と同時に、貧困地域の教

育にも多大な関心とご支援を頂きました。この数年、民間団体、あるいは個人の援助によって、貧困地域で学校を建設し、教育設備を充実し、さらに貧困学生の為に、“ウユン奨学基金”、“どんぐりモンゴリ奨学基金”などが設立され、のべ300名の貧困学生が奨学金の援助を受けながら、学業を完成させました。

日本の植林協力隊の皆さんは、厳しい自然環境に負けず、春は砂嵐と戦って、夏は炎天下、秋は寒気の中、様々な困難を乗り越えて来ました。彼らのなかには90才、80才の高齢の方もいれば、10才未満の小学生もいます、彼らの一生懸命奉仕する精神が地元の人々に感動されました。彼らは広く地元の農牧民と交流を深めてきました。“日本人なのに、どうして自分のお金を使ってまで、私たちのために緑化に協力するのですか”と聞かれた時、日本人は“私たちはみんな地球人ですから、地球の環境が破壊されて、地球上のすべての人間がそれを復元させる義務があります、後世の為に美しい地球を残したい”との答えは地元の人々にたちまち尊敬されました。国境を越えて、この精神は人々を感動させます。毎年、日本から、小学生、中学生、大学生達が植林活動に参加して、この活動を通じて中国を理解し、中国の生活体験もできて、彼らは中国の子供達と一緒に植林し、一緒に歌を歌い、ともに遊び、お互いに語学を勉強し、とても仲が良いです。この光景を見る度に、私は心から喜びます。彼らから21世紀の中日友好の希望が見えてきます。

ここで、特にNPO法人どんぐりモンゴリの皆様さんが、長年、ホルチン沙漠の緑化事業に尽力して来たことを讃えたいと思います。子供たちと苗木を作り、植林実験

など各段階で一所懸命頑張って、多大な努力を惜しまずにやって来ました。

さらに尊敬すべきことに、貧困家庭の学生に学資を出して、現在13名の貧困学生がどんぐりモンゴリ奨学金の支援を受けています。この子達は、高校まで、学費の心配なく勉強が出来るようになりました。学校以外の時間を利用し、烏雲農場に来て苗木づくりを行って、技術を習得したり、日本語の勉強をしたりしています。この子達はみんな成績優秀です。最初にこの奨学金を受けた子供達はすでに高校を卒業し、希望した大学に進学しました。

角和さんはこの事業のため、日本で勤めていた会社を早期退職して、沙漠地へ来て、日本と中国の間を毎年何度も往復して、ご自分の全てをこの活動に捧げてきました。彼らを愛し、勉強の時は厳しい先生であり、貧困学生にとっては、優しいお父さんのような存在でした。貧困家庭が、子供の教育費を払えるようになる為に、沙漠地をブルドーザーで開墾してビニールの水田を作り、トウモロコシ栽培から米、野菜生産に転換するなど、様々な収入増加策を考案し、それに関わる資金援助して来ました。

私は沙漠の人民を代表して、各界の友人達が中日友好、沙漠緑化事業、環境の改善事業、及び教育へと資金援助して来たことに、最高の敬意と心よりの感謝を表したいと思います。

私は中国残留孤児ですが、中日両国の人民の愛を受けましたこと、日本の同胞が支えと激励をくださいましたこともすべて私の心の中に永遠に刻印され、今後、今以上に努力し、両国の人民の期待に答えられるように、あなた方とともに、両国の友好に力を緩めず、頑張って行きたいと思います。

■講演者プロフィール

中国名：烏雲（Uyun）、日本名：立花珠美（TACHIBANA Tamami）

昭和13年に、立花正市、シヅコの二女として徳島市で出生。2歳半の時、兄（甫）を残して、家族5人が旧満州興安南省王爺廟に移住。昭和20年、父（官吏）が通遼市に出張中にソ連軍の侵攻を受け、葛根廟付近で戦車隊に襲われ、珠美さんを残して家族全員が死亡。この時の犠牲者は1500名。当時7歳の珠美さんは中国人の張さんに助けられた。翌年に、モンゴル族の養父アルタンオチルと漢族の王秀廷に引き取られ、ウユンと名づけられる。

極貧の中、養父母に教育を受けさせてもらい、優秀生として奨学金を受け、内蒙古師範大学を卒業、教師となる。同僚教師と結婚後、2人の子どもをもうける。

文革中は、養父母が日本人を育てた「スパイ」と糾弾されたが、ウユンの居所を隠し、勤務先の同僚教師も生徒も庇い通した。

日中国交回復後、肉親探しを始め、徳島の兄が判明。1981年、一時帰国し、兄と再会。永住帰国を勧められたが、養母と中国に恩返しをする為、中国へ還り、教育に献身した。1990年、全国教育者模範賞を受賞。1991年、内モンゴル自治区政治協商会議常務委員に選出。

1992年、日中国交20周年記念番組として、彼女の半生を描いた中日合作テレビドラマ「大草原に還る日」が日中両国で放映され、



植林に携わる烏雲さん（右から2人目）



烏雲さんの半生について書かれた『烏雲物語』（原田一美著、2001年、徳島県教育印刷）発行

大きな感動を呼んだ。1993年、中国人民協商会議全国委員会第8回全国委員に選出。1994年、庫倫旗第一中学校を定年退職。沙漠植林ボランティア協会の協力で、内モンゴル自治区ホルチン沙漠において「烏雲の森」の植林活動を開始。現在、通遼市海外交流会名誉会長、通遼市女性企業家協会名誉会長、庫倫旗第一中学校名誉校長などを務める傍ら、植林、貧困家庭の教育支援などを続けている。